

たけの子 誕生物語①



わたしがよく聞かれるのは「なぜこれをしようと思ったのか」ということです。福島市から米沢市に毎日通ってまで続けている野外保育。その原動力、そしてそもそもなぜ始めようと思ったのかを知りたいと思われるでしょう。それをお話するには、まずはわたし自身のことからお話するのが一番だと思います。

わたしには7歳年上の姉がいます。その姉が兄弟をほしがり、何度か流産を繰り返した後、母は35歳でわたしを出産しました。一番上の兄は心臓弁膜症のため一歳で他界したこともあり、病弱なわたしは母の心配の種であったようです。

わたしが4歳の年に父が他界。子煩悩な父はわたしをよく肩車してくれました。顔は覚えていませんが、その感覚だけはよく覚えています。

その後、母は女手ひとつで、わたしと姉を育ててくれました。昼は父と始めた食堂を経営し、出前も悪い足で歩いてやっていました。母は夜もバーで働いて、家計を支えました。

しつけに厳しい母で、姉と雪の中外へ出されたこともあり。そして、よくはたかれました。

そんな母はわたしによく「人と違ったことをしなさい、同じことをしてもしかたがない」と言っていました。そして決して裕福ではありませんでしたが、母は

困った人がいると、筆筒の中から「人には一番いいものを贈るもの」と、選んでいました。

わたしは、小学校一年の時に鼠径ヘルニアの治療のために、長期入院。そんな幼少期の影響からか、明るさと暗さを合わせもつ子だったと思います。

20歳の年、キリスト教会に改宗。父や兄が亡くなっていたことから、家族は永遠であるという教えにひかれたためでした。

2002年、福島ゴダーイ合唱団に入団。音楽そのものというよりも音楽監督の降矢美彌子先生の言葉に感動し、惹かれたことからでした。

福島ゴダーイ合唱団は教師の再教育のために創られたということ、降矢先生の「常に学びなさい」という言葉に影響を受け、わたし自身も幼児教育に携わりたいと思い、2008年保育士資格を取得しました。2006年に神奈川県自主保育グループ「つくしんぼ」に合唱団が招かれたことをきっかけに、野外保育という園舎を持たない保育形態があることを初めて知りました。つくしんぼでは、子ども達は毎日リュックを背負い、公園に縄跳びや遊び道具を詰めたりヤカーを引いて出かけていました。わたしはちょうど保育士の勉強を始めたところでした。

なんとかつくしんぼの現場を体験させてもらって、わたしは福島で同様の保育グループを仲間と立ち上げる決意を固めたのです。つくしんぼのスタッフは、未資格の卒園児の母親がほとんどでした。創立当時のたけの子スタッフも保育士未資格の方がほとんどでした。ちなみにたけの子祭りの原型はつくしんぼ祭りを参考に組み立てられています。

福島で自宅を解放して始めたい。でも、当時夫の実家に義父と同居をしていたわたしは、義父の理解を得るのは無理だと思い、とにかく、資格だけはとっておこうと保育士の勉強をしていました。

しかし、なんと、2007年、突然義父が亡くなりました。翌年、保育士資格も3回目にして合格。9教科のうち2教科（小児栄養、保育実習理論）は今までの在宅ビジネスと学習センターでのボランティア活動や合唱団で学んだことが活かされました。わたしの人生はこつちを準備するために備えられていたのだと感じました。

そんな時、次女は中2から不登校になりました。一時的なものではなく、中学校の卒業式にもでませんでした。

正直悩んだのです。でも、もしもここでわたしが諦めたら、娘達に夢に向かって生きて欲しいと願っても、それを諦める背中を見せてしまう。しかも、娘のことがからんでいると示してしまうので、娘とは別の人生だと思い、わたしも前に進むことにしました。不登校児を抱える親が、他人の子どもを預かって教育を語れるのだろうかという迷いはありましたが、だからこそ、それが他人の痛みがわかる強みになるのではと思ったのです。

2008年10月からプレ保育を開始し、最大15組ぐらいの親子が参加していたと思います。

でも2009年4月に実際に入園してくれたのはたったひとりでした……。

この続きはまた次回に。